要約

小中学校では、地域と協働でボランティア活動に取り組むような活動が盛んに行われており、環境教育と組み合わせて実施されている。このような活動は意義が強調される一方で、その効果はあまり明確に表されてこなかった。本研究では札幌市豊平区の A 中学校の協力を得て、学校教育における地域活動の効果を将来の活動への参加意図、エンパワメント、社会的アイデンティティの観点から検討した。当該の中学校では、希望者だけが参加する自発的な公園の美化活動(voluntary な活動)と授業の一環として 1 年生全員参加で行う花植え運動(mandatory な活動)の両方の活動をそれぞれ地域と連携して行っている。本研究では、これらの活動の前後に質問紙調査を行い、効果の測定を行った。その結果、voluntary な活動への参加者は、はじめからエンパワメントや参加意図、社会的アイデンティティが高く、さらに活動を通じてより高まったものもあった。一方、mandatory な活動のみの参加者は、はじめからエンパワメントも参加意図も社会的アイデンティティも低いが、とくに参加を通じて高まることはなかった。ところが、mandatory な活動へすら参加しなかった生徒たちは、より参加意図が低下していくことが明らかになった。